スミス経済学の一系譜

——アダム・スミスとカルヴィニズム——

本井康博

I 問題の所在

アダム・スミスは世上，宗教的には「理神論者」[1] あるいは「自然神学者」として知られている．したがって彼の信仰は理神論者に特有の「極めて冷やかなもの」（大河内一男『スミスとリスト』〈全訂版〉69ページ）である，との見方が有力である．

この点，スミスの伝記者として周知のハースト F. Hirst は早くから次のように指摘している．

「道徳情操論及び他の著作には彼れ〔スミス〕が其友ヒュウム，其師アリストオトルよりも寧ろ積極的にして確固たる信仰を有する有神論者たることを示す幾多の章句はあるけれども，彼れが基督教徒たることを示すものは極めて少ないか，或は皆無である」（小泉信三『アダム・スミス，マルサス，リカアドオ』34ページ．〔 〕は本井，以下同）

日本においても次に見るように事情は同じである．

「彼〔スミス〕は理神論の積極的な信奉者ではあったが，しかし決してクリスチャンではなかった．歴史的なキリスト教或は現実的な宗教 positive religion の信者ではなかった．彼の宗教的態度はあくまで理神論的な限界内に止まっていた」（大道安次郎『スミス経済学の生成と発展』61—62ページ，旧かなを改めた）

---

1) 「理神論」deism についてはいろいろな定義が可能であるが，さしあたって「現世」と「人間」中心の理性的な宗教である，との一般的な規定にしたがっておきたい．見られるようにそれは現世の人間的な幸福よりも「来世」と「神の栄光」とを至高と考える初期カルヴィニズムに特有のあの徹底的に悲観的な要素を欠く．

このようにスミスの宗教意識の中にキリスト教の生きた信仰を認めない見解が支配的である．もっとも，史実の上では晩年のスミスを無神論者として非難した人びとが同時代にいたにもかかわらず（たとえば J. レイ〈大内兵衛・大内節子訳〉『アダム・スミス伝』393—394ページ）スミスを無神論者とまで極言する研究家はさすがに見受けられない（高島善哉『アダム・スミス』36ページ）．

本稿ではスミスを理神論者とみる通説に再検討を加え，スミスの宗教意識が通常言われるように「極めて冷やかなもの」であったのか，いま一度問い直してみたい．とは言え，私たちは「理神論者スミス」をまっこうから否定し去ろうというのではけっしてない．理性の時代たる18世紀を「啓蒙主義者」として生きたスミスは（E. トレルチ〈内田芳明訳〉『ルネサンスと宗教改革』102ページ）同時代人のフランクリン B. Franklin と同様に，「すでに無力化しつつあるピュウリタンの生活規準の埒をこえた人物」（M. ウェーバー〈梶山力・大塚久雄訳〉『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』上，62ページ 註1）と見なすことが許されるので，スミスを広い意味で理神論者として特徴づけることは可能である．彼の蔵書の中に神学書がほとんど含まれていないのはそれを物語ってくれてはいよう（J. レイ，前掲書，412ページ）．ここで問い直したいのは彼の理神論の内実が理性中心のひからびたものであるのか，それは教派色のない無色のものなのか，という点である．

ちなみに，フランクリンは15歳ころに「完全な理神論者」になった，と自ら告白するように（B. フランクリン〈松本慎一・西川正身訳〉『フランクリン自伝』91ページ）あきらかに「どの教派にも属しない理神論者」（M. ウェーバー，前掲書，上，47ページ）であった．これに対して，スミスは熱狂的で積極的な信徒とは言えないまでも「長老派に属する理神論者」として捉えられないか，というのが本稿の問いかけである．

すなわち，本稿の狙いは通説において著しく否定的なスミスのエートスにおけるキリスト教的な要素，なかんずく長老派を一派とするカルヴィニズム（禁欲的プロテスタンティズム）[2] の影響を明らかにすることにある．

カルヴィニズムの視角からスミスをとらえ直すことは，エートスとロゴスとを決して分離して扱わなかったスミス（高島善哉，前掲書，51ページ）を論じるさいには，とりわけエートスが人間類型や価値観と不可分の関連を有している以上，スミス経済学の中軸とも言うべき「経済人」や「労働価値論」を語るさいには有益となるはずである．さらにこの作業は，彼の「自然神学」——スミスはまとまった論述を残さなかった——を残された著作から再構成[3]するときには避けて通れない．

多くの研究家がスミスのさめた理神論に温いキリスト教信仰を認めることに著しく否定的ななかで，ギンツバーグ E. Ginzberg の次の指摘は傾聴に値する．

「〔スミスは〕狂信的な長老派信者に対して不平をもらすことがあった．かれらの厳格で気むずかしい生活の規律を彼は嫌ってはいたが，かれらの道徳的な熱情からは少なからぬものを吸収した」(E. Ginzberg, *The House of Adam Smith*, p. 11, 傍点は本井)

スミスが排斥したのは長老派の狂信的な信仰であり，決して長老派の信仰（宗教的な熱情）そのものではなかったのではないか．さらにカウダー E. Cauder は一層明白に次のように述べている．

「彼〔スミス〕は理神論者であったにもかかわらず，その生涯を通じて長老派に深い共感をあらわしていた」(E. Cauder, *A History of Marginal Utility Theory*, pp. 5-6, 傍点は本井)

本稿は結局においてカウダーのこの指摘に内容面での裏づけを行なうにすぎない．後述するように彼の説には多少の混乱が見られるとはいえ，カルヴィニ

2) 一口にプロテスタンティズム（ピュウリタニズム）と言っても広義のそれには非カルヴィニズム——思想的にはルネサンス・ヒューマニズムを媒介としてヘレニズムにつながるものであり，その点ではむしろカトリシズムやアングリカニズムと多くの共通性をもつ（浜林正夫『イギリス市民革命史』59ページ 註1）——も含まれるので，私たちは狭義のプロテスタンティズム，すなわち禁欲的プロテスタンティズムたるカルヴィニズムに限定したい．

3) 久保芳和「アダム・スミスの宗教観」『経済学論究』（関西学院大学）第38巻 第3号，1984年10月，は数少ないその試みのひとつである．

ズムをスミス価値論の支柱とみなす見解は卓見と言わざるをえない.

II　スミスの故郷と家系

カルヴィニズム（長老派）へのスミスの「深い共感」ぶりを明らかにするにあたって，まず彼が生きた時代と社会，すなわち18世紀のスコットランド，なかでも生地たるカーコウディと青少年期を過したグラスゴウとの宗教的雰囲気に注目してみたい.

スミスが生きた18世紀後半のスコットランドは，しばしば「エディンバラの黄金時代」とか「スコットランドの復興期」とか呼ばれている．スミスが認めるように経済的にはいぜんとしてイギリスの後塵を拝していたとはいえ，当時のスコットランドの意気はすこぶる高かった．なかでもグラスゴウは植民地貿易による経済的な興隆を背景に市民の間には清新で自由な雰囲気が見受けられた．この街は宗教的には長老派が圧倒的な支配をふるっていた.

もともと「スコットランドはカルヴァン主義がヨーロッパ中でとくに最も強固に確立された国であった」(R. H. ベイントン〈倉塚平・田中真造訳〉『宗教改革』114ページ）が，スモレット T. G. Smollet の言葉を借れば，とりわけ「この町〔グラスゴウ〕の人々はその勤勉（インダストリー）と商業精神と長老教会（プレズビティリアン）の規律厳守とにおいて，顕著なものがある」(水田洋『アダム・スミス研究入門』54ページ).

スモレットがグラスゴウに見出した「勤勉」や「商業精神」,「長老教会の規律厳守」は「資本主義の精神」(M. ウェーバー）をただちに想起させてくれる.「消費都市」のエディンバラでさえ1720年には婦人装身具商がたった一軒しかなかったほどである．虚飾を嫌う長老教会の影響力の大きさがよくうかがえる.「商業都市」のグラスゴウでは，スミスが言うように「数年にひとつというほどにも〔中略〕秩序の破かいはおこらない」という状態であった(以上，同上，18，54ページ).

生活規律に厳格なあまり，カルヴィニズムは劇場を「悪魔の祭殿」とみなす

にいたった．グラスゴウでも演劇や劇場に対する嫌悪感が見受けられ，スミス自身も1762年には反劇場運動に参加しているほどである（水田洋，前掲書，54ページ；J．レイ，前掲書，97—101ページ）．これは彼が長老教会の主張に共鳴していたひとつの証左でもあるが，かかる行動はスミスの演劇趣味と撞着するとしてスミス研究家はいちようにその解釈に苦しんでいる（水田洋，前掲書，15，41，130ページ；小泉信三，前掲書，50ページ；E. Ginzberg, *ibid.*, pp. 257–258 n45）．

こうした長老派による市民生活の規制ぶりはカルヴァン時代のジュネーブの政治に一脈相通じるものがある．ちなみにこのジュネーブはスミスが早くから熱烈に称賛していた国であり，後年の大陸旅行中にも彼はこの国を訪れ——そこには尊敬するヴォルテールが住んでいた——２カ月もの間，滞在している（水田洋，前掲書，122ページ）．

なお，政治的に見れば，グラスゴウはスコットランドのジャコバイト運動（スチュアート王朝復興運動）——スコットランドの後進地域である北部高地 Highland の氏族制度 clanship（封建遺制）とわかちがたく結びついている——において，はっきりと反ジャコバイトの立場（ハノーヴァ王朝支持）に立っていた（後に見るようにスミスもまたこの立場に立つ）．これはグラスゴウの進歩性をよく物語っている（高島善哉，前掲書，30ページ）．

スミスの生地，カーコウディもまたグラスゴウ同様に長老派の色彩が濃厚な街であった．住民たちは，1638年にチャールズ１世が企図した監督制度（監督派）に対して長老派を擁護するため国民盟約を結んで勇敢にたたかっている（E. Cauder, *ibid.*, p. 6 n9）．

以上の素描だけでもスミスが生まれ育った街の宗教的雰囲気がおおよそ明瞭になったことであろう．彼は幼ないときから長老派のこうした影響を周囲から強く受けて育ったはずである．そのことは，彼の家系を見るとき一層明らかとなる．

スミスの家系には反ジャコバイトの血が流れこんでいた（高島善哉，前掲書，30ページ）．この点，「アダム・スミスのスコットランドは〔封建制を色濃く残

す北部低地ではなく，進歩的な〕南部低地 Lowland のそれであった」のである（C. R. Fay, *Adam Smith and the Scotland of His Day*, p. 10）.

スミスの両親はともに長老派の信仰を有していた.

父アダム・スミスはカーコウディ関税監督官に任命されるまではラウドウン伯 Earl of Loudoun（スコットランド相）の私設秘書をつとめていた．このラウドウン伯は熱心な長老派信徒にしてホイッグ党員であったから，父スミスもまた伯と同じ信条であったと推測できる（J．レイ，前掲書，1ページ；水田洋，前掲書，12ページ，13ページ 註3；小泉信三，前掲書，5ページ）．現に，スミスの政治的な立場が「頑強なホイッグ党員」（J．レイ，前掲書，202ページ）であった父親譲りのものであったことは知られている.

スミスの母は，息子への影響という点ではほぼ60年という長期にわたって，父親（スミスの生前になくなった）とは比較にならない圧倒的な力を発揮した．誠に「スミスの母は終始彼〔スミス〕の生活の中核であった」（J．レー，前掲書，5ページ）．その母は「宗教心の強い」人で（大内兵衛「解題」93ページ，アダム・スミス〈大内兵衛・松川七郎訳〉『諸国民の富』V），聖書以外はほとんど何も読まなかった，とさえ言われる（アンドレー・アニーキン〈小檜山愛子訳〉『アダム・スミスの生涯』62ページ）.

彼女の宗派（長老派か監督派か）に関しては決定的な史料を欠くが，息子のスミスを誕生直後に長老派の教会で受洗させている（E. Cauder, *ibid.*, p. 6 n8）ことから長老派と断定できよう．彼女が監督派でないことは別の面からも後述する.

この母親の「まじめな信仰」はスコットランドの貿易や商業とならんで少年スミスに大きな感化を与えた．そればかりか「この敬虔な婦人のゆるぎない信仰」はスミスのほぼ全生涯に「決して消えることのない」影響を及ぼした（G. S. Montgomery Jr., *The Return of Adam Smith*, p. 4）．スミスがほとんど終生，母親と居を共にし，「母のもとにやすらいの場を見出した」（J．レイ，前掲書，5ページ）事実を想起するとき，長老派とこの母子との結びつきは私たちの想

像以上のものであったに相違ない．信仰深い母親への変らぬ孝行ぶりの中にスミスの信仰の発露を見い出す牧師さえいる．この牧師がスミスの母を死の床に見舞ったとき，息子のスミス（すでに61歳）は終始部屋にいて共に祈りを捧げた．その祈りはキリストの名においてキリストのためになされたという（J. レイ，前掲書，493ページ）．この母子をかくまで結び合わせた絆は長老派の生ける信仰であった，と言えば言いすぎであろうか．

Ⅲ　グラスゴウ大学

次に，スミスがスコットランドで学んだ学校の宗教的雰囲気をみてみたい．

スミスはスコットランドで最良といわれたカーコウディ町立学校で初等教育を受けている．ここで彼は多くの長老派の人びとと接触する機会に恵まれたが，そのなかにはのちに長老教会の大会議長として2度にわたってスコットランド教会（長老派）の教権を握ったドライスデール J. Drysdale も含まれていた (E. Cauder, *ibid.*, p. 6 n8)．ドライスデールは同じ長老派のスミス家とは特に親しく，「スミスがドライスデール以上に好きだった人，または懐かしさをこめて語った人は，数多くの友人のなかにもなかった」とさえ伝えられている (C. R. Fay, *ibid.*, p. 17; J. レイ，前掲書，8—9ページ)．

つづいてスミスは1737年にグラスゴウ大学に進んだ．当時この大学がオックスフォードやケンブリッジよりも水準が高く，オランダの諸大学と並んで新しい学問の場を代表していたことはよく知られている．一般に当時のスコットランドの大学は民主的で大衆的であった (Sir C. G. Robertson, *The British Universities*, p. 11)．

スコットランドの諸大学がもつこうした進歩性は長老派の信仰に基づくのであろう．個人の「良心」を何よりも尊重するピュウリタンたちは，おのずから「信仰（思想）の自由」や「表現（学問）の自由」への道を積極的に開拓する人たちであったからである（高島善哉，前掲書，31ページ)．

グラスゴウ大学の場合，進歩性を創造するうえでメルヴィル A. Melville の

貢献を忘れるわけにはいかない：彼はノックスと並び称せられるスコットランドの宗教改革者であると同時に，グラスゴウ大学の首席教授 Principal としてさまざまな教学上の改革を行ない非常な成功をおさめた．彼によって礎石を与えられたこの大学の民主的な学風をしたって，グラスゴウ大学には遠くイングランドやアイルランドからも学生が集まってきた．イングランドやアイルランドの大学では英国国教（監督派）の信徒たち以外（つまり長老派などの非国教徒たちには）門戸が開かれていなかっただけになおさらであった（以上，J. D. Mackie, *The University of Glasgow 1451–1951*, pp. 63 ff, 171）．すなわち，「社会状態についてもっとも進歩した見解をもち，偉大な公共的精神にもえた人々をみつけるためには，主として国教反対者（ディセンター）の群のなかに，もとめなければならなかったが，かれらの特別な学校は，ふるいひからびた方法をのりこえて前進し，そしてかれらはオクスフォードとケインブリジの宗教審査のために，もっとひらけたスコットランドやオランダの大学にいかざるをえなかった」（ウィリアムズ B. Williams）と言われるゆえんである（水田洋，前掲書，30ページ）．

グラスゴウ大学の学生はおよそ300名で「主としてスコットランドやアイルランドのプロテスタント学生」であった（高島善哉，前掲書，31ページ）．後年，スミスが教鞭をとったときも事情はほとんど変らず，学生の大部分は長老派の牧師志願者で，一部アイルランドの非国教徒が混じっていた（水田洋，前掲書，88ページ）．

学生と並んで教授陣についても同じ傾向が見られた．大学自体が長老派教会と緊密な結びつきをもっていたことから教授の多くは牧師の息子であった．教授の補充は長老派教会と密接な関係を有するごく小さなサークル（clan!）で決められた．首席教授の座は1858年まで伝統的に長老派の牧師が独占していた（J. D. Mackie, *ibid.*, pp. 185–186）．

名誉革命後，英国教会に代って長老派が再び息を吹きかえしたときにはグラスゴウ大学では教授陣は全員，「ウェストミンスター信仰告白」に署名をした

うえに長老派の統治形態を承認する義務が生じたので大幅な人事移動が見られた (*op. cit.*, pp. 133-134). のちにスミスもまたグラスゴウ大学の教授就任にさいして，この有名な信仰告白に署名をしている事実はのちに見るであろう.

学生時代，スミスはこの大学で数多くの長老派の友人や師と交わりを深めている．とりわけ，周知の「忘れえぬハチソン Dr. Hutcheson」から多大の影響を受けた．彼はスコットランド南西部からアイルランドへ移住した長老派の牧師の孫であった (J. D. Mackie, *ibid.*, p. 234). この「最も戦闘的なプロテスタント」は「つよくスミスの一生を決定した」のである (大内兵衛，前掲論文，94ページ).

ハチソンは同僚のリーチマン W. Leechman (副総長 Vice-Rector をへてのちに首席教授) と共にグラスゴウ大学の看板教授として大学の名声を高からしめた (J. D. Mackie, *ibid.*, pp. 203, 235). スミスが後年，担当することになる「道徳哲学」の講座はハチソンの師であるカーマイケル G. Carmichael (いわゆる「スコットランド学派」の創始者) に始まり (*op. cit.*, p. 161)，ハチソン，クレイギー T. Craigie をへてスミスへと引き継がれていく．したがって，「清教徒中の清教徒」にして「陰鬱なカルヴィン主義」に身をつつまれたカーマイケル (J．レイ，前掲書，15ページ) の「げんかくなピュウリタニズム」(水田洋，前掲書，20ページ) がハチソンを通じ，はるかスミスにいたるまで連綿と消えることなく (もちろん多少の水割りはさけられないものの) 伝えられた，と考えるのが自然ではなかろうか.

ところで，このハチソンに関しては次のような事件が伝えられている．スミスがグラスゴウ大学に入学した1737年に地区の長老会議は，その講義がウェストミンスター信仰告白に反しているとしてハチソンを糾弾したというのである (J．レイ，前掲書，15ページ). この事件に関してハチソンの信仰をどのように理解すべきであろうか．次のふたつの事からして事件が実際におこりえる素地があったことは否定できないように思う.

まず，ハチソンの同僚，リーチマンの場合にも教授就任にあたってリベラル

な神学が問題となり，当初，グラスゴウの長老会議からウェストミンスター信仰告白への署名（教授就任には不可欠）をこばまれたことがあった．つぎに，ハチソンの神学は決して異端的ではなかったが外観はリベラルであった（J. D. Mackie, *ibid.*, pp. 202, 235）．

以上の2点のほかにも次のような事情をも考慮に入れるべきであろう．

ハチソンとほぼ同時期に神学部のシムソン教授 J. Simson が長老会議から異端者とみなされ，牧師と教授とを共に辞任すべきであると命ぜられた事件がおきている．大学はこの時，敢然とこれを拒否したので，大学の進歩性を示すものとして時に評価されたりする（水田洋，前掲書，18—19ページ）．

事件の展開を今少し子細に見てみると，1714年にシムソンがアルミニウス主義 Arminianism を教えたとして非難されたことに端を発している．10年後，彼は今度はアリウス派の教義 Arianism を説いたかどで訴えられ，1729年にはついに活動を禁止されている．そのため1740年に彼が没するまでキャンベル N. Campbell がシムソンの代講をせざるをえなかった（J. D. Mackie, *ibid.*, pp. 164-165）．

シムソンをめぐる事件のおよその内容は以上である．ここでは次の2点に留意すべきである．

第1の点は，シムソンがアルミニウス主義やアリウス主義といった反長老派的色彩の濃厚な立場に立っていたことである．ちなみにアルミニウス主義は「極端な預定説の拒否を教理上の特質とし，『世俗内的禁欲』を排斥した」宗教で，主としてオランダの前期的な大商人に信奉され，その教義は英国国教（アングリカニズム）にも採用されている（M. ウェーバー，前掲書，下，10ページ 註1）．

第2の点は，当時，学内には総長の選出方法をめぐって対立が生じていたことである．一方では主席教授のスターリング J. Stirling を頭とする主流派，他方でカーマイケルを代表とする反主流派（スターリングの独裁を非難）とが反目を続け，ついに1727年にいたって大学改革にまで発展するようになった．

ここで看過してならないのは，シムソンが主流派に属していたことである．スターリングはシムソンを始め血のつながりのある身内でポストを固めようとしていたからスターリングがシムソンの保護に積極的であったことはむしろ当然である (J. D. Mackie, *ibid.*, p. 174).

以上の2点を考慮に入れるならば，先の一連の事件が大学内部や，大学と結びつく長老会議に見られた派閥的な対立と決して無縁ではない，と考えられる．したがって，大学当局がシムソン教授を長老会議から守ろうとする動きをただちに進歩的とみなすことは差し控えねばならない（なお，*op. cit.*, pp. 164–165, 174–177 をも参照）．

なお，18世紀のグラスゴウ大学について付言すれば，学内では血のつながり（同族意識）が重要視されており，人情と派閥とが学内人事のいたる所で大きな力をふるっていた．たとえば，教授の席をまるで私有物のように親から子へ，兄から弟へと相続（！）することは当然のことと見なされ，その例は驚くほど多い (*op. cit.*, pp. 186–187)．大学に巣くうこうした後進性と対決する者こそが進歩的という名に値するのである．

さて，ハチソンに戻ると，彼の言動はスミスの母親に匹敵するほどスミスに大きな感化を与えた．とりわけそのことは学問の分野では顕著である．レイ J. Rae の言葉を借れば「スミスは，あるときはヒュームの弟子といわれ，あるときはケネーの弟子ともいわれる．だが，もし彼が誰かの弟子であるというならば，むしろハチソンの弟子である」（J．レイ，前掲書，14ページ）．

ちなみに，「ヒュームの弟子」スミスについてこの場で触れておくと，「無神論者」ヒューム D. Hume との交際をとらえて，スミス研究家はスミスの宗教意識を無神論とは規定しないまでも「極めて冷やかなもの」と見なすのが一般的である．たとえば，典型的にはギンツバークの次のような見解．

> 「彼〔スミス〕のグラスゴウ時代を通じて，熱狂的な長老派信者たちはたえず彼の神学上の信念や発言をせんさくしていた．ヒュームとの交誼は，スミスが異端的な見解をもっていたことの何よりの証左である」(E. Ginzberg, *ibid.*, pp. 113–114. 傍点

は本井．なお，J．レイ，前掲書，158ページをも参照）．

なお，キャナン E. Cannan は，ヒュームをもってしても『諸国民の富』（初版）に見られるスミスの「極端な新教的立場」を放棄させるにいたらせられなかった，と指摘している．ヒュームの影響がスミスに顕著にあらわれるのはようやくヒュームの死後，すなわち1776年以降のことである，ともいう（E．キャナン「編者の序論」，21ページ，『諸国民の富』I）．

価値論においてスミスは明らかに「ハチソンの弟子」である．ハチソンは早くに商品の価値はその効用に「まったくしたがわない」ことを明らかにした（R. L. ミーク〈水田洋・宮本義男訳〉『労働価値論史研究』32ページ）．これこそ「スミスの価値論の出発点」であった（松田弘三『科学的経済学の成立過程』51ページ註44）．つまりハチソンはスミスに先立って，労働こそ富の源泉であり価値の真の尺度であると考えていた（J．レイ，前掲書，17ページ）．このようにハチソンが「効用価値論」を否定するのは後述するように彼もまたカルヴィニズムの地盤の上に立っていることを傍証してくれている．

ハチソンはまた，グラスゴウ大学で旧習を破って英語で講義をした最初の人でもある．その変革は外面にとどまらず，講義の内面的な変化と深く絡みあってもいる．すなわち，彼はスコラ哲学のテキストにラテン語で注釈をほどこすというそれまでの伝統的なやり方に代えて，スコットランドなまり Doric の混ざった英語を使って独自の――もちろん当初は師のカーマイケルの借り物であったろうが――道徳哲学を講義し始めた（C. R. Ray, *ibid.*, p. 18; J. D. Mackie, *ibid.*, p. 235）．

ハチソンが内外両面にわたってこのように革新した道徳哲学の講座は，第3代目の病弱な教授，クレイギーを介して4代目のスミスにそのまま受け継がれることは後に見る通りである．

IV　ベリオール・カレッジ

グラスゴウ大学で3年間学んだスミスは，1740年に「スネル奨学金」Snell

Exhibitions の給費生に選ばれ，オックスフォード大学のベリオール・カレッジ Balliol College へ留学することになった．これより6年間にわたり彼はここで学生生活を送るが，グラスゴウ大学と相違して充実した生活とはおよそ言い難かった．特別の友人も師もなく，図書館を利用して主に古典語を自習している．「私はベリオールを好まなかったし，嫌悪の念をもって去った」と自身で回顧していることも周知の事柄である．

ここでの数年は次のように極論されるほど内容のないものであった．

「〔スミスの留学は〕直接には大変非生産的な，しかし彼にかくも下らん学校があってしかもその下らん学校を出ることが上流社会に入るためには必須のルートになっているという事実を認識させた意味では大変有益であった」（内田義彦『経済学の生誕』99ページ）

かくまでの「非生産性」はどこに原因があったのか．

まず最初にあげるべきは当時のイングランド諸大学の沈滞ぶりである．オックスフォード大学でも全体がおよそ「反動教授の巣窟」という有様であった（大内兵衛，前掲論文，94ページ）．くわえて教授たちの怠慢ぶりはスミスの眼にあまるものがあった．講義はわずかに週2回であったが，それさえも「教えるふりをすることさえまったくやめている」状態であった（A．スミス，前掲書IV，126ページ）．教師は「その能力と勤勉のかぎりをつくして自分のあらゆる義務をはたす」べきであると確信していたスミス（彼は後年，それを実行に移している）にとっては（同上，125ページ），これは大きな失望であった．

低調な講義のほかにこの大学が伝統と特権とのうえにあぐらをかく保守性に支配されていたこともスミスに嫌悪感を抱かせることになった．この点は本稿の観点からみて大きな意味をもつのでやや詳しく見てみたい．

オックスフォードの保守性は，政治的にはトーリー党とジャコバイト（スチュアート王朝）とを支持し，宗教的にはアングリカニズムを信奉するという点に典型的にあらわれていた．スミスはいずれにおいてもまさに逆の立場であった（C. R. Fay, *ibid.*, p. 9；J. レイ，前掲書，25，27ページ；水田洋，前掲書，32ページを

も参照）．前者に関して言えば，スミスの留学中（1745年）にもスチュアート王朝の復興を狙うジャコバイトの反乱がおきている．スミスは反ジャコバイトの進歩派として学内で白眼視されていたから，スミスの内面的緊張は予想以上に大きかったのではないか．現にスミスの伝記者として有名なスコット W. R. Scott は，スミスがベリオールを去った最大の理由として大学のジャコバイト支持の姿勢をあげているほどである（W. R. Scott, *New Light on Adam Smith*, p. 55 in *Adam Smith Critical Assessments*, Vol. 1）．

後者については，オックスフォードがケンブリッジと並んでアングリカニズムの支柱をなし，多年にわたり国教会に多くの教役者を送りこんできたことを忘れてはならない．こうした両者の緊密なつながりから，逆に聖職者が大学の神学を支配するようになり，それ以降は大学のカリキュラムは何世紀にもわたって変更が加えられることなく，まさに時代遅れそのものと化すにいたった（E. Ginzberg, *ibid.*, p. 105）．

アングリカニズムは「外面上の性格でも純粋な信徒の精神についてもカトリシズムに類似している」ために（M. ウェーバー，前掲書，下，8ページ），オックスフォードは大陸の大学――カルヴィニズムが支配的なオランダを除く――とりわけカトリック国たるイタリアやフランスの諸大学と傾向を同じくする（E. Cauder, *ibid.*, p. 8 n10）．これらの大学ではアリストテレス主義やスコラ哲学が最高の権威とされ，それ以外の学問は異端としてすべて排斥されていた．オックスフォード大学は実にイギリスにおける「アリストテレス主義の牙城」であった（*op. cit.*, p. 6）．

スミスがアリストテレス主義に嫌悪感を抱いていたことはのちに見る通りであるが，長老派の濃厚な雰囲気の中でそれまで育ち，学んできたスミスがオックスフォードに対し政治，学問，宗教のそれぞれの分野で異和感を抱いたことは容易に想像できることである．それだけに，オックスフォードでの「アダム・スミスのつき合い circle はほとんど例外なくプロテスタントであり，ハノーヴァー王朝支持者であった」（C. R. Fay, *ibid.*, pp. 8-9）のはやむをえなか

った.

スミスがベリオールを去って数カ月後のことであるが，大学での主流派たるスチュアート王朝派に属する学生たち（ジャコバイト）がハノーヴァー王朝派に対して暴力事件をおこし，裁判所から2年の禁固刑を申し渡されたことがあった．ところが大学当局はこれを不服として，はるかに軽い形ばかりの処罰ですませた．この事件はスミスたち少数派の学生が置かれた状況をよく示してくれている（J．レイ，前掲書，27—28ページ）.

スミスがベリオールになじめなかったいまひとつの理由は，学生だけではなく大学当局までもがスコットランドからの留学生を田舎者として軽蔑し，差別する風潮があったことである（同上，31—32ページ）．スコットランド特有の訛があったからである．「アダム・スミスはその生涯のはじめの14，5年間は，ややまるだしのスコットランド語で話していた．おそらくかれは，オクスフォードにゆくまでは，本当に英語とよびうるようなことばは話したことがなかった」（W．バジョット〈長洲一二訳〉「人としてのアダム・スミス」下，140ページ，高島善哉編『スミス国富論講義』2）という有様であった.

留学生のうちでもとりわけ奨学生は軽蔑の対象とされた（白杉庄一郎『経済学史概説』109ページ）．実に「スネル給費生は大学生活からほぼ，しめ出されていた」（水田洋，前掲書，29ページ）．ハーストによれば，ベリオールの学生100人中，スコットランドの出身者は約8人，そのうち4人がスネル給費生であった（同上，34ページ 註2；J．レイ，前掲書，31ページ）．1744年にスネル給費生たち（スミスも含まれよう）はベリオールでのこうした差別的なとり扱いに対してグラスゴウ大学評議委員会 Glasgow Senatus に訴え出ているほどであるから（J．レイ，前掲書，32ページ），相当の差別があったことが推測できよう．1776年にいたってもなお両者間に紛争が生じており，ベリオール側からグラスゴウ大学に対し，給費生を全員，別のカレッジに転校させるという提案がなされている（同上）.

以上の理由のほかに，大学での経済的負担の大きさを見過すことはできない.

16ポンドを送金してくれたいとこにあてて入学直後のスミスが次のように書き送っていることからみても，入学時の負担は相当なものであった．

「ことしの大学における出費は必然的にこれからのどの時期よりもずっと多額になるにちがいありません．入学にさいして法外でとてつもない納付金を納めなければならないからです」(*Letter of A. Smith to W. Smith*, 24 Aug. 1740 in *The Correspondence of Adam Smith*, p. 1)

スミスが受けたスネル奨学金は入学後6カ月を経過しないと支給されなかったため，最初の半年間（いわば試験期間 probation）はどうしても自活する必要があった（J. D. Mackie, *ibid.*, p. 128）．スミスの嘆きももっともであった．おまけに，イングランドの大学にくらべてはるかに民衆的なスコットランドの大学では，学費はすこぶる安かっただけに（C. G. Robertson, *ibid.*, p. 11）ベリオールの授業料の高さはこたえたに相違ない．ちなみに，ベリオールでは食費が年間30ポンド，チューターの謝礼が4ポンドであるのに対し，自費学生の年間の学費は最低でも60ポンドほどかかったという（J．レイ，前掲書，24ページ）．一方，スネル奨学金は入学後半年を経過した時点から半年単位で20ポンドが支給され，4年目からは30ポンドに増額（基金が増加すればさらに増額）されることになっていた（J. D. Mackie, *ibid.*, p. 128）．

スネル奨学金でスミスの生活は保証されていた，とのケインズ J. M. Keynes（J. M. Keynes, *Adam Smith as Student and Professor*, p. 76 in *Adam Smith Critical Assessments*, Vol. 1）の見解とは逆にスミスは母親からの仕送りを必要とした．母親にあてて「お金をまだ受けとっていません」と催促の手紙を送らざるをえなかった（*The Correspondence of Adam Smith*, p. 5）．後述するようにスミスの家計は決して楽ではなかった．彼は仕送りのほかになんらかの形で生活費の不足を調達する必要があったはずである．入学2年後に彼はウォーナー奨学金（年額8ポンド5シリング）をも受給し，主として食費の補助にあてたという（デューゴルド・ステュアート〈福鎌忠恕訳〉『アダム・スミスの生涯と著作』97ページ）が，不足を十分に満たすほどではなかったであろう．

生活費を調達しなければならない無理が勉学の面での過労とあいまってスミスの体力を衰えさせたのではあるまいか（水田洋，前掲書，34ページ参照）．スミスが6年におよぶ留学期間中に帰国する——住み心地のよくないオックスフォードからあの懐しい母のもとへ戻る——ことが一度もなかったのは旅費（20ポンドは下らなかった）に事欠いたからに相違ない（J．レイ，前掲書，23ページ；水田洋，前掲書，31ページ）．

V　スネル奨学金

これまでスネル奨学金は注目されることが少なかったのでスミスとの関係を詳しくみておきたい．

この奨学金は1677年（一説には1679年）にグラスゴウ大学卒業生で商人のJ．スネル J. Snell が創設した．学内はもちろん，開かれた奨学金としてはヨーロッパ中でもっとも価値あるものであった．給付期間は10年，場合によっては11年という長期のもので，スミスの年には2人が選ばれており，彼は23人目の給費生としてベリオールに送られた．この奨学金の有利性を考慮に入れると，彼が4年の給付期間を残してあえて中途でこれを放棄して帰省したのには相当の理由がなければならない（J. D. Mackie, *ibid.*, p. 128; W. R. Scott, *ibid.*, pp. 54-55）．

大学に残された記録によれば，スミスが奨学生に選ばれたのは1740年3月4日のことでオックスフォードの入学許可（同年7月7日）の4カ月前にあたる．一方，奨学金の辞退を正式に当局に申し出たのは1749年2月4日で，大学中退（1746年8月15日ころ）よりなぜか3年後のことである（D．ステュアート，前掲書，96—97ページ；*Letter of A. Smith to Dr. Theophilus Leigh*, 4 Feb. 1749 in *The Correspondence of Adam Smtih*, pp. 3-4）．

スネル奨学金にはふたつの条件がついていた．まず，給費生はスコットランドで生まれ，教育を受け，少くともグラスゴウ大学に2年間，もしくはグラスゴウに1年とスコットランドの他大学に2年間在学した者に限られる．次に，

創設者のスネルが英国教会の監督制度をスコットランドにも移殖したいと願っていたことから，給費生は国教が支配的なベリオールで教育を受けたのちスコットランドに帰国し，監督派の僧職につく義務があった（J. D. Mackie, *ibid.*, p. 128）.

一方，給費生の受け入れ先であるベリオール・カレッジ（創設は1263年）は，創設者のベリオール J. de Balliol を通じてスコットランドとは深いつながりを有していた．彼はかつてスコットランドの摂政者をつとめたことがあるからである（J. T. ロジャーズ〈山田秀雄訳〉「『国富論』編者序文」上，147ページ，『スミス国富論講義』4）.

こうした性格と条件とをもつスネル奨学金に関して，スミスがふたつ目の条件を欠いているだけになぜ彼がこれに応募し，そして採用されたのか，疑問が消えなかった.

この疑問については，「何れにしても個人心理の問題で推測を出ません」と断りながらも内田義彦氏は次のように解答されている.

> 「いったい奨学金を得るときから，果してスミスがその義務を遂行する気であったかどうかは確定できません．新しい学問を身につけたスミスが，もともと聖職につくことをまじめに考えるはずもないとも考えられます．しかしまた，スミスはきちょうめんな人ですから，義務をやぶるということをさいしょから計算にいれるほど，ずぶとくなかったとも考えられます．おそらくは，オックスフォード大学での研究中に次第にかれの生涯の進路がこれとはちがうことがハッキリしてきたのでしょう」（内田義彦『経済学史講義』117ページ）

本稿では以下の理由で，スミスは入学の時点ですでに監督派の僧職につく意志はまったくなかったと考える.

スネル奨学金が設定された1677年（王政復古は1660年！）はスコットランドに監督教会が復活してまもない時であった．すなわち，スネルを始め監督派の支持者たちが息を吹きかえし，主流派として活躍を始めていた頃に相当する．ところが，名誉革命後の1690年，すなわち奨学金創設の13年後に監督制度が廃

止され，再びスコットランドに長老派の支配が確立された．この時，その性格からしてスネル奨学金そのものが存亡の危機に見舞われたのはむしろ当然のことと言えよう．「けれどもスネル寄附金は存続」されることになった（J. D. ロジャーズ，前掲書，上，147ページ）．だが，奨学金の本来の目的はここで挫折したのである（J．レイ，前掲書，19—20ページ）．

こうした事態の変化に直面して，監督派と結ぶオックスフォード大学はスネル奨学金のそもそもの狙いである監督派牧師の養成をひき続き確保するための法案まで用意した．が，あえなく否決された．一方，スネル奨学金を支給する側からは，監督制度が消失した以上は創設者の遺志を貫くことは不可能，との論拠のもとにスネルの娘に代って訴訟がおこされた．けれども，これもまた大法官裁判所 Court of Chancery により却下されている．そればかりか，この時，基金はあたらしく大学の評議員の管理に移されたうえ，僧職につくという条件そのものが削除されてしまった（J. D. Mackie, *ibid.*, pp. 128–129）．

したがって，卒業後は監督派の牧師になることを義務づけた例の給付条件は1690年ころ削除されてしまい，その後現在にいたるまで復活の動きはあったとしても再び有効となることはなかった．削除後，半世紀を経て受給したスミスの時代には，条件はすでに「慣行上形式的なものになっていた」（高島善哉，『アダム・スミス』34ページ）というよりも条件の規定そのものが消失していたと見るべきであろう．とはいえ，スミスの在学中にもこれを復活させる訴えが裁判所に持ちこまれている——結果は却下されたが——ことを考えると（J．レイ，前掲書，20ページ），根強い抵抗が続いていたことになる．この事件は先述した，給費生がグラスゴウ大学へ不満を訴え出たこととなんらかの関連があるのかもしれない．

ちなみに，グラスゴウ大学にスミスが教授として戻っていた時にもスネル奨学金をめぐってベリオールとの間に紛争が生じており，スミス自身が調停にあたっている．残念ながら原因など詳細は不明である（同上，84ページ；小泉信三，前掲書，48ページ）．

ともあれ，スミスはベリオール入学にあたって，卒業後に監督派の僧職につくことを考慮する必要も，またその意志もなかったと考えてよい．この点，「スミスの母は彼〔スミス〕を監督派の牧師にしたかったので，彼をスネル奨学金の援助を受けてオックスフォードへ送った」とするカウダーの見解（E. Cauder, *ibid.*, p. 6 n8）は正鵠を得ていない．スミスの母（そしておそらくはスミスもまた）は長老派の信仰を堅持したまま，この奨学金の恩恵に浴することができたはずである．

スミス母子にとって幸いなことには，スネル奨学金は単にオックスフォードに留学するための奨学金に変質していた（D. ラファエル〈久保芳和訳〉『アダム・スミスの哲学思考』11ページ）．したがって給費生は「まったく自由に」好むところの宗教や職業，居住地を選択できるようになっていたのである（J. レイ，前掲書，20ページ；D. D. Raphael, *Adam Smith*, pp 9–10）．そしてまた，贈与権もグラスゴウ大学の教授たち（評議員か）に移管されていたので，奨学金は「自然のなりゆきとして」最優等生に賞として（つまり宗教に関係なく）あたえられていた（J. レイ，前掲書，19ページ）．反監督派的なスミスにとって，学資のためとは言え同派の牧師になることなど一瞬といえども考えられなかったことであろう．

このような見解をいま少し確かなものとするために，オックスフォード在学中にスミスは僧職につく約束を反古にしたとの支配的な考えについて検討を加えてみたい．

そのさい，史実に反して例の給付条件がスミスの時代にも厳然としていきていた，との仮定のもとに話しを進めてみる．

まず，スミスが誓約を途中で破棄するような人物であったかどうか，が問題となろう．先にも見たように彼はあまりにも「きちょうめんな人」（内田義彦）でありすぎた．スミスを直接に少しでも知る者は，ほとんど例外なく彼の「誠実さ」を認めている．彼は「知的誠実さ」（M. ウェーバー）を誰よりも大切にした人である．スミスがフランス旅行のために教授職を辞任したときなど大

学当局は彼の「たぐいまれな誠実」さを公式に表明したほどである（水田洋，前掲書，116ページ 註5）．几重面で厳格という彼の性格はグラスゴウ大学の保守性，すなわち教授たちによる講座や大学の私物化に対してスミスが終始，抵抗したことにもよく示されている（同上，87ページ．同種のエピソードは小泉信三，前掲書，50—51，87—89，195—196ページにも見られる）．

彼の「原則をまもりとおす厳格さ」は時として形式主義的すぎるとさえ言われるほどであった（水田洋，前掲書，88ページ．なお，M. ウェーバー，前掲書，下，160—161 註6をも参照）．その点，「正義をおこなう騎士風の熱心さ」はしばしば「ドン・キホーテ的なものに近づいた」とするシュンペーター J. A. Schumpeter のウェーバー評（出口勇蔵『ウェーバーの経済学方法論』〈増補版〉61ページ註11）を私たちに想起させてくれる．ちなみにシュンペーターはスミスを「良心的で・ある程度まで骨身を惜しまぬ・きちょうめんな・釣合のとれた・誠実の人」ととらえている（J. A. シュンペーター〈東畑精一訳〉『経済分析の歴史』I，378ページ）．

スミスが誠実なあまり，その未定稿がすべて死の直前に彼の指示で焼却されてしまったことは遺憾に思わざるをえない．

次に，スミスが約束を守るような「きちょうめんな人」ではなかった，というほとんどありえない仮定（したがって本稿には一層不利な条件）にしたがってみたい．

この場合にも，スミスが最初の約束を堂々と（ずぶとく！）破ることができない事情があったことを考えるべきである．すなわち，卒業後に所定の義務を果たさなかった場合には「500ポンドの罰金」がスネルの給費生には課せられていた（J. D. Mackie, *ibid.*, p. 128; J. レイ，前掲書，19ページ; J. M. Keynes, *ibid.*, p. 84 n2）．この罰則も徐々に効力を失なってきており，スミスが給付を受けているさなかにもこの義務を強制できるかどうか，裁判で争われたという．判決が「否」と出たのはそれより14年後であった（J. M. Keynes, *ibid.*, p. 85 n2）．この裁判は，先に見た給付条件の復活をめぐる動きと連動しておこされたもの

であろう．

それにしても，奨学金を受けねば進学できない家庭にとって500ポンドは大金である．それは晩年のスミスが最高の名声の中で税関管理人として得た年俸——カーライルによれば500ポンド（W. バジョット，前掲論文，下，144ページ 註1）．関税事務についてなお100ポンドの支給があったともいう（小泉信三，前掲書，197ページ）——にほぼ匹敵する額であった．

ちなみに，スミスが道徳哲学教授として得た年収は170ポンドに満たなかった（J. レイ，前掲書，62ページ）．また，バックリー公 Duke of Buccleuch のつきそい教師としての年収が300ポンド（300ポンドの終身年金つき）であったことは比較的よく知られている．

ともかく，ベリオール入学直後のスミスの嘆き（前述）からして500ポンドの罰則金は自力ではまず調達不可能な金額であったに相違ない．スミス家の家計に関しては推測の域を出ないが，父親の晩年の年収から判断して残された母子が裕福であったとは思えない（小泉信三，前掲書，6ページ）．カーコウディの関税監督官として父親が手にした年収は，最初は30ポンド，のちには40ポンドに昇給したが，附帯収入があったので実収入はこの2，3倍に上るのが常である，と伝えられている．一説には100ポンド前後ともいう（同上，5ページ；J. レイ，前掲書，2ページ）．

父親は「かれ〔息子〕によい教育をあたえるに十分」な遺産を残して亡くなったとも（水田洋，前掲書，12—13ページ），母親は「相当な地主」の娘であったとも（J. レイ，前掲書，1ページ）伝えられているので，教育費の安いスコットランドで学ぶ間はなんとかスミスの教育費をまかなえたのであろう．

学生時代のスミスにはなん人かの後見人がいたようであるが，スミスの母親は財政的な援助をかれらに大きく頼ることはなかったのではないか．たとえつましくても自主独立（self-made man!）こそ最高の美徳とするのがピュウリタンの常であった．のちに見るように，「借財がないこと」がスミスの幸福観の大切な要素であった．「依頼心ほど人類を腐敗せしめるものはない．しかるに

独立心はやはり人民の廉直を増進するのである」(スミス「グラスゴウ講義」)とのスミスの信念(高島善哉『アダム・スミスの市民社会体系』54ページ)はそのままそっくり母親のものではなかったか.

以上, スミス家の家計から判断して, スミスが500ポンドの罰則金を支払うという無理をしてまで奨学金に伴う約束を破棄したとはとうてい考えられないことが明らかになったはずである. この点だけから見ても, 卒業後, 牧会に身を投じる約束を破ったことをもってスミスをキリスト者でないと断定すること(たとえば大道安次郎, 前掲書, 62ページ)がいかに史実から遠いか, 納得できよう.

ところで多くのスミス伝は, スコットランドへ帰国したのちスミスがほぼ2年間, 故郷で母と共に住み, 著作に励む以外にはなんらの定職にもつかなかったことを伝えている. そうした生活は, スミス家の家計が豊かであったことを示すというよりも(場合によっては彼はこの間もスネル奨学金を受給していたのかもしれない), むしろ留学中に経験したさまざまな異和感や経済的な苦悩から生まれた心身両面にわたる疲労をいやすためのやむをえないものであった, とみるべきであろう. 生計に関して「定まった前途も職もなしに」(W. バジョット, 前掲書, 上, 155ページ)中退して帰国したスミスにしてみれば, 母親のもとで傷心をいやすための保養第一の生活ではなかったか. 別の面からみれば, 就職のための準備期間でもあった. 現にスミスは個人的な欠陥(後述)のために学者として身をたてる道をなかなか見出せなかった(水田洋, 前掲書, 37ページ).

家計がようやく安定を見せるのは1749年以降ではなかったか. この年スミスは異母兄の死によりその遺産を相続しているからである(同上, 46ページ; J. M. Keynes, *ibid.*, p. 76). さらにこの前年にはスミスはエディンバラで公開講座を初めて行ない, 100ポンドの収入を得ているばかりかジャコバイトの亡命詩人の詩集を出版するなどようやく社会的活動に乗り出している(水田洋, 前掲書, 38—39ページ; 小泉信三, 前掲書, 25ページ).

さて, これまでのことを要約してみれば, 一般に流布している次のような見

解は二重の誤まり，つまりひとつはスミスの教派（長老派）に関する，いまひとつはスネル奨学金に関する誤解に基づくことが諒解されるはずである．

「オクスフォードのスネル奨学資金はしばしばイングランド教会〔監督派〕への通路であった．そしてアダム・スミスがそれをそうしたものとして用いることが意図されていたようである．〔中略〕アダム・スミスは，かれの友人たちの願いに反して，イングランド教会に入るという考えを完全に放棄し，定まった前途も職もなしにスコットランドへ帰った」（W. バジョット，前掲書，上，155ページ）

「かれ〔スミス〕の最初の〔留学の〕意図は，英国教会の僧職につくことにあったようであるが，かれは，かれのオクスフォードでの履歴の終ったとき，あるいは終るまえにその目的を放棄した」（J. D. ロジャーズ，前掲論文，上，148ページ）

こうした誤解は推測するに最初のスミス伝作者たるスチュアート D. S. Stewart に起因する．彼は1793年――スミスの死後3年目！――にエディンバラで行なった友人，スミスについての講演の中で次のように述べている．

「彼はもともとイングランド教会の僧職につくべく定められていてそのためにオックスフォードへ派遣されたのですが，僧職が自分の好みに合わないことがわかりましたから，スミスはこのさい友人たちの希望よりもむしろ自分自身の好みに従う方を選びました．そして彼のために友人たちがたててくれたすべての計画をいっさい投げうって帰省することにいたしました」（D. Stewart, *Account of the Life and Writings of Adam Smith, LL. D.*, p. 410 in *The Works of Adam Smith*, Vol. 5; D. スチュアート，前掲書，8ページ）

スチュアートのスミス伝は同時代の人の筆になるだけにその後のスミス伝の「隅の首石」となったのはごく自然のことである．スミスを直接知る彼がスミスの教派とスネル奨学金とに関してなぜ古典的なとでも言うべき誤解をおかしたのか，誠に不可解である．福鎌忠恕氏は，スチュアートは全般的に「往々筆が走りすぎて，しばしば独断と曲解に陥いっている」といみじくも指摘されている（D. スチュアート，前掲書，327ページ）．彼の「独断と曲解」とはいまにいたるまで語りつがれている．たとえばカウダーは（のちには訂正されたが）

1953年の論文の中でさえもスミスを英国教会で受洗したものと誤解していたほどである (E. Cauder, *ibid.*, p. 6 n8). ちなみに, カウダーにはアングリカニズム (監督派) とカルヴィニズム (長老派) との本質的な差異が理解されていないように見受けられる. とはいえ, 先に見たようにスミスが幼児洗礼を受けた教会が長老派であることを初めて指摘したのは彼である.

さて, これまでのスネル奨学金の検討を通して, スミスが英国教会や監督派に対してはベリオール入学の前であれ後であれ, 終始, 首尾一貫した態度をとっていたことが確証されたと思われる. かえって, なぜにスミス母子が, 立場と主張とを異にするベリオールをあえて選んだのか, という疑問さえわいてくる.

「かれ〔スミス〕の生涯をかけるべき仕事についても, もしいくらかな助力をあたえたとして, きわめてわずかであった」(スコット W. R. Scott) と言われるほどのオックスフォードの惨めな状態は (水田洋, 前掲書, 33ページ) スミス母子として早くからつかんでいたのではなかったか. なぜにスミスは「ライデンよりもむしろオックスフォードへ行く」(C. R. Fay, *ibid.*, p. 9) ことに心ひかれたのであろうか.

ライデン大学やユトレヒト大学などオランダの諸大学は, ペティ W. Petty が学んだころからすでにカルヴィニズムが支配する大学であり (松川七郎『ウィリアム・ペティ』上, 105, 120ページ), カトリシズムの基礎のうえにアリストテレス主義やスコラ哲学を最高の権威とするフランスやイタリアの諸大学とは好対照を示していた. スミスがライデンを選ばなかったのは彼の留学観によるのかもしれない. 彼は当時, 流行となっていた青少年の外国留学を『諸国民の富』の中で「不条理きわまる慣行」と痛罵しているが (A. スミス, 前掲書IV, 146ページ), その萌しは早くも青年時代に見られたのであろうか.

スコットによれば, スミス母子がグラスゴウ大学を選んだ主な理由は, 将来スネル奨学金が利用できることとグラスゴウ在住の叔母にスミスの保護を依頼できることのふたつであったという (大道安次郎, 前掲書, 64—65ページ 註11;

D. D. Raphael, *ibid.*, p. 9). そうであれば，グラスゴウ大学に入る前からベリオールへの道はすでにひらかれていたと言うべきである．そしてこれ以外には財政的にみて上級学校への進学はこの親子には考えにくかったのであろう．スミスは後年，自分をオックスフォードへ送ってくれた母校に対し深い感謝を表明している（D. Stewart, *ibid.*, p. 516; D. ステュアート，前掲書，90ページ）が，それはとりもなおさずスネル奨学金への感謝であったはずである．

なお，ベリオールに在学中，スミスが中途からいまひとつウォーナー奨学金の受給者となったことをここで想起されたい．実はこの奨学金の方がスネル奨学金以上にスミスに心理的な負担をかけたのではないか，とさえ思われる．というのは，設立者のウォーナーが英国国教の僧職者であることやスミスを奨学生に推薦したのがカンタベリー大僧正であったことからみて（W. R. Scott, *ibid.*, p. 54），この奨学金はかつてのスネル奨学金同様に監督派のそれであると思われる．生活のためとは言え，監督派からの援助はスミスの独立心をさいなませることにならなかったであろうか．

それにしても，スミスが払った精神的，肉体的な代償に比してオックスフォードが与えてくれたものはあまりにも小さかった．図書館での古典語の自習と生きた英語の習得以外にはさしたる成果のないまま，「反動教授の巣窟」にして「アリストテレス主義の牙城」，「ジャコバイト反動の中心地」からスミスは故郷に舞い戻った．そしてそのままついにオックスフォードに戻ることはなかった．

VI　グラスゴウ大学教授

1751年，ベリオールを去って5年にしてスミスは母校グラスゴウ大学の論理学教授に迎えられた．かりにスミスがスネル奨学金の給付期間（10年もしくは11年）いっぱいベリオールに在学し，同校の校風にそまっていたならば，グラスゴウ大学のポストを手に入れるのは難しかったであろう，と推測するのはスコットである．教授の選任にあたってはスコットランド人としての名声が物を

言ったからという (W. R. Scott, *ibid.*, p. 55).

教授就任にあたってスミスはグラスゴウの長老教会中会でウェストミンスター信仰告白に署名をした (E. Cauder, *ibid.*, p. 6 n8; J. レイ, 前掲書, 53ページ). 先述もしたようにこれはどの教授にも要請されたものである. スミスもまた「所定の手続きと儀式」とをふんだのである (小泉信三, 前掲書, 29ページ). スミスがそのさい, 自己の「くもりなき良心」——彼の幸福観は「健康で借財がなく, これに加えてくもりなき良心があるならば, その上幸福に何をつけ加えることができようか」との一句に集約されている (大河内一男, 前掲書, 123ページ参照)——に反して面従腹背したとはとうてい考えられない.

スミスが署名したウェストミンスター信仰告白 (1647年制定) は, カルヴィニズムの最大の特徴である「預定説」がもっとも鮮やかに盛りこまれたものである. 「ピュウリタニズムの神曲」とも呼ばれる『失楽園』の著者, ミルトン J. Milton はこの教説を批判して, 「たとい地獄に堕されようとも, 私はこのような神を絶対に尊敬することはできない」と語ったと伝えられている[4].

もちろんミルトンとスミスとでは時代の相違を考慮に入れるべきだが, それにもかかわらず, カルヴァンの精神を「そのまま要約した」(青山秀夫『マックス・ウェーバー』156ページ) この恐ろしい信仰告白にスミスが良心に基づき, したがって心から署名をしたことは, 彼が長老派の教会で幼児洗礼を受けた (正確には, 受けさせられた) こととは比較にならぬ程の大きな意味を帯びてくる.

前にも触れたようにグラスゴウ大学は長老派色が濃かった. そのため, 「彼〔スミス〕の学生の大多数は長老教会の牧師志願の青年で, そのうちかなりの部分——全体のほぼ三分の一——は母国の大学から不当にもしめだされたアイルランドの非国教徒〔長老派〕であった」(J. レイ, 前掲書, 71ページ; 小泉信三, 前掲書, 31ページ). スミスの講義はかれら牧師の卵たち (なかには本職の説教者や相当に学力の進んだ神学法学生もいた) にすこぶる好評で, 「大学を

4) M. ウェーバー, 前掲書, 下, 20ページ. ミルトンがはたしてピュウリタンであったかどうかは研究家の間で意見がわかれる. ウェーバーは広義のピュウリタンと見ている (同上, 下, 24ページ 註1).

卒業しようと思わない」連中さえあらわれるほどであった（水田洋，前掲書，71ページ）．こうした好評ぶりは，スミスが長老派の生ける信仰に基づいて講義を進めたことを傍証してくれてはいないだろうか．さめた理神論だけでは考えにくい事柄だからである．

スミスは教授就任講演こそラテン語（それはベリオールでの数少ない収穫）で行なったが，ふだんの講義はハチソンにならって母国語（それもあの訛つきの〆）を使用した（同上，64ページ）．その意義は予想以上に大きいと言わねばならない．というのは，それにより彼は「二つの異なる言葉」の対立――スミス流に言えば「僧侶の言語と人民の言語」，「神聖な言語と世俗の言語」，「学者の言語と無学者の言語」（A．スミス，前掲書Ⅳ，134ページ）――換言すれば「言語の二重構造」を揚棄しようと努めたからである．

このことは，民衆と世俗の言葉を使用した点でスミスがかの宗教改革者たちと同じ立場に立ったことを意味する．ラテン語の世界にあくまでもとじこもった人文主義者（ヒューマニスト）とは一線を画すことになる．いったいにスミスは言語や文体に少なからぬ関心を示しており，グラスゴウの学生時代に早くも「最大の関心をもって」研究を始めている位である（D. S. Stewart, *ibid.*, p. 409；D．ステュアート，前掲書，7ページ）．

外面上の変革は内面の変化を伴なっていた．教授上の改革をスミスは内外両面で行なったのである．彼の愛弟子，ミラー J. Millar の言葉を借れば，「スミス氏は，この大学に着任するや論理学教授を担当することになったが，かれは先任者たちが守ってきた講義案から大幅にはなれなければならないこと，そしてスコラ学派の論理学や形而上学よりも興味があって有益な研究へと学生たちの注意をむけさせなければならないことをさっそくかんじた」（J．レイ，前掲書，68ページ；D．ステュアート，前掲書，10ページ）．

スミスは『諸国民の富』の中でも，伝統的な論理学が「無益なせんさくと詭弁」とに陥いっているとしてこれを痛罵している（A．スミス，前掲書Ⅳ，140ページ他）．彼はハチソン同様，反スコラ学の立場を明白にした．その意味では，

スミスが目指したものは論理学（形而上学）の「本質的な変革」なのであった（水田洋，前掲書，68ページ．なお，篠原久「アダム・スミスとスコラ論理学」『経済学論究』〈関西学院大学〉第30巻 第4号，1977年1月をも参照）．

この点からみるとカウダーのように（彼ひとりに限らないが）スミスに与えたアリストテレスの影響（とりわけプラスの）をあまりに強調することにはにわかに賛同しがたい．カウダーによれば，「アダム・スミスは〔オックスフォード大学で〕アリストテレスに関する知識を徹底的に吸収した」ので，アリストテレスやスコラ哲学者の理論はスミスの価値論の中でカルヴィニズムと並ぶ2大支柱となりえた，というのである（E. Cauder, *ibid.*, pp. 6-7, p. 7 n9）．スミスとアリストテレスとの関連については後段でさらに触れるはずであるが，カウダーがカルヴィニズムをスミス価値論の支柱とみなしていることは行論上，注目しておかれたい．

ところで，スミスの講義が多くの学生をひきつけたのは教授上の内外両面にわたる変革が主たる原因であったが，それに加えて教育にかける彼の情熱も大きな要素であった．教えるふりさえしなかったオックスフォードの教授にくらべれば，スミスの「勤勉」ぶりはまさにピュウリタン的である．早朝の講義は7時半にすでに始められ，午前中はひき続き授業で占められていた．午後や夜はこれまた毎週のように各種の市民の集い（クラブ）に参加している（水田洋，前掲書，85—86ページ；J．レイ，前掲書，64ページ）．「その能力と勤勉のかぎりをつくして自分のあらゆる義務をはた」したスミスにして初めて次の言葉がいきてくる．

> 「教師が真にその義務を履行するばあい，学生の大部分がその義務を怠るなどという実例は一つもない，とわたしは信じている．真に出席するだけの価値がある講義なら，それに出席することを強制する規律などはまったく不必要」である（A．スミス，前掲書IV，125，131ページ）

学生のひとり，ミラーはスミスの人気ぶりを証して言う．彼の講義は決して優雅な教え方ではなかったが，決して学生を飽かせることがなく，またその名

声をしたって，時には「彼がいるから」遠方からも非常に多くの学生が大学に集った，と（D. Stewart, *ibid.*, pp. 415–416；D. ステュアート，前掲書，12ページ）．

スミスの勤勉さをいかんなく示すエピソードが伝えられている．1758年にエディンバラ大学の公法学担当に欠員が生じたので友人たちはスミスを後任に推薦しようとしたが，彼はそれに応じなかった．そのポストは収入は多いが閑職だから，というのが拒否の理由であった（水田洋，前掲書，83ページ）．

ウェーバーの言う「職業人たらんと欲した」ピュウリタン（M. ウェーバー，前掲書，下，245ページ）の典型をここに見る思いがする．

勤勉と並んで義務感と責任感の強さもまたスミスに特徴的なものである．彼は「小教派」（長老派を念頭においてのことか）は通常「厳粛な道徳」に支配され，不快なまでに酷烈で非社交的であることが多い，と自ら指摘しているが（A．スミス，前掲書Ⅳ，184ページ），それは彼が育ったカーコウディやグラスゴウでの体験に基づくのであろう．前に見たようにスミスの場合，「原則をまもりとおす厳格さ」がいささか形式主義的になりやすかった，とさえ言われているが，それは彼が小教派――その狂信性はあくまでも排除しつつ――に共鳴するひとりであったことを逆に物語っているのではないだろうか．

ところで，スミスの信仰が「極めて冷やかなもの」にすぎないとされる場合，その根拠として，彼が講義の始めの祈禱を省略するように大学当局に訴え出たことや，礼拝中に笑ったり，教会の鐘がなっている時にわざわざ散歩に出たり，といった「反教会的」な態度がよくあげられる（水田洋，前掲書，71—72ページ；高島善哉『アダム・スミス』36ページ；大道安次郎，前掲書，36ページ；E. Ginzberg, *ibid.*, p. 114；J. レイ，前掲書，74—75ページ）．

けれどもレイによれば，この種のエピソードはまったく注目に値しない出まかせのゴシップにすぎないという（J．レイ，前掲書，75ページ）．実際に，スミスに特有の厳格さや「放心の発作と独語癖」――このために彼は大学卒業後，なかなか就職が難しかったとさえ言われる――があったゆえにさまざまな奇行が生まれ，ひいては「反教会的」なゴシップにつながった，とは考えられない

であろうか（水田洋，前掲書，29，47ページならびにW．バジョット，前掲論文，上，150—151ページを参照）．あるときなど放心状態のまま夜明け前に家を出て，かなりの距離を歩いてから朝の教会の鐘で初めて我に帰ったことがあるほどのスミスのことである．先に見たようなゴシップには事欠かなかったはずである（J．レイ，前掲書，323ページ）．スミスにまつわる諸々の非難やゴシップ類は，ハチソンやリーチマンの場合と同様に大学や教会内部における派閥間の抗争（同上，85ページ）とも無関係ではなかったにちがいない．

最後にスミスの宗教意識が長老派のそれであることを彼の著作についてみておきたい．

幸いにも『諸国民の富』（第5編第1章第3節）に彼の宗教論の一端を見ることができる．スミスの立場が英国国教（監督派）ではなくスコットランド教会（長老派）にあることは一読して明らかである．前者は「監督制度的統治」を温存し，僧職者の間に「従属関係」が見出されるのに対し，後者は「教会統治の長老制的形態」をもち，僧職者の間には「もっとも完全な平等性」が存在する，とされている（A．スミス，前掲書IV，206，208—209ページ）．

またスミスによれば，教会への寄附財産は大学の場合と同様に聖職者の勤勉や名声といった「利己心」を不要のものとするために断じて排斥されるべきであった．ローマ教会（カトリック）や英国教会といった「クリスト教界でのずばぬけて富裕な，寄附財産も多い教会」はスコットランドの「きわめてまずしい寄附財産しかない教会」に比して，民衆の中での信仰の統一や献身の熱意，秩序の精神，規律正しさという点でははるかに劣らざるをえないとされている（同上IV，214，218ページ）．

こうしてスミスは長老派を高く評価して言う．

「おそらくはヨーロッパのどこへ行っても，オランダ・ジニーヴァ・スイスおよびスコットランドの長老派教会の僧職者の大部分のものより以上に，学識があり，端正で，独立的で，尊敬すべき一群の人々はほとんどみいだせないであろう」（同上IV，211—212ページ．なお213，214—215，218—219ページをも参照．傍点は本井）．

このようにスミスは英国教会やカトリック教会よりも自国の小さな長老派教会にはるかに大きな親近感を寄せていた．そうした想いは，友人のひとりに「思うに君はあまりにも長老派の肩をもちすぎる」と言わせるほどに (E. Cauder, *ibid.*, p. 6 n8) 外にあらわれざるをえなかった．スミスは自ら「小生は新教徒」であると断言しているが（J．レイ，前掲書，185ページ），その「新教徒」とは「カルヴィニスト（長老派信徒）」を指す，と考えられないであろうか．

これとは逆に，スミスを反カルヴィニストとする見解がときに見受けられる．たとえばギンツバーグ．「スミスはカトリシズムに対してよりもプロテスタンティズムの方に対してはるかに批判的であった」というのである (E. Ginzberg, *ibid.*, p. 113)．こうした誤解はひとつにはスミスに見られる「独立派」Independent に対する冷淡さをそのままカルヴィニズム一般にまで拡大させることに起因しているのであろう．確かにスミスは，同じカルヴィニズムでも独立派の教会政治を「無教会統治」としてとらえ，「疑いもなくきわめて粗暴な熱狂者の一宗派」ときめつけている（A．スミス，前掲書IV，179—180ページ）．スミスはどこまでも狂信性を排斥した．周知のようにピュウリタン革命以後，長老派と独立派とは敵対関係にあったので，スミスの反独立派的な態度は長老派への共鳴と決して矛盾するものではない．

VII　労働価値論とカルヴィニズム

経済学史をひもとく者は誰しも次の一事に気づくことであろう．すなわち，「効用価値論」がイタリアやフランスといったラテン系の学者により展開されてきたのに対し，「労働価値論」は主としてイギリスの学者により発展させられてきた事実である (E. Cauder, *ibid.*, p. 3; J. A. シュンペーター，前掲書IV, 2217—2218ページ)．ちなみにマルクスは「フランスの経済学」と「イギリスの経済学」との間には不断の「国民的な対照」が見られる，と指摘している（K．マルクス〈大内兵衛・細川嘉六監訳〉『経済学批判』36，39ページ『マルクス・エンゲルス全集』第13巻）．

カウダーはこうしたふたつの価値論の対立をそれぞれが基盤とする宗教にまでさかのぼらせ，「トマス主義対ピュウリタニズム」とか「カトリック・トマス主義的思考類型対プロテスタント・ピュウリタン的思考類型」としてとらえようとする (E. Cauder, *ibid.*, p. 4).

確かに労働価値論はペティに始まりロック，フランクリン，スミスを経てマルクスにいたり大成されている．濃厚なピュウリタン的世界で育ったペティやロック，フランクリンなどと並べてスミスを「プロテスタント・ピュウリタン的思考類型」の中に含めることは，彼の経済学，なかんずく労働価値論を理解するうえで欠かせない視角を与えてくれるはずである．

というのは，労働価値論はその生成期においてカルヴィニズムという宗教的基盤を有していた，と考えられるからである．いま，その要点だけを摘記すれば，両者のかかわりは次の2点に集約できよう．

まず第1点は，カウダーも言うようにカルヴィニズムに特有の「職業義務」の観念に見られる「労働」を神聖とみなす思想が，労働を価値の源泉とみる価値論を生み出すひとつの契機となった，という点である．

第2点は，カルヴィニズムにおいてもっとも徹底した形であらわれた「平等」の概念——マルクス流に言えば「人間の同等性の概念」——が「すべての労働の同等性」（マルクス）を生み出したことである．この結果，労働をもって商業社会（交換社会）における共通の客観的な価値（交換価値！）基準——スミスは「価値の唯一の普遍的な，かつ正確な尺度」と表現する——とすることが初めて可能となったのである（K．マルクス〈長谷部文雄訳〉『資本論』第1巻，56ページ，河出書房；A．スミス，前掲書I，163ページ）．なお，スミスは「カルヴィンの信奉者たち」が僧職者（したがって，当然，民衆も同様であろう）の間に「もっとも完全な平等性」を確立した，と指摘する（A．スミス，前掲書IV，208ページ）．言うまでもないが，平等にして独立した人格の存在こそ商品を交換するさいの不可欠の前提である．

以上の2点が承認できるとすれば，私たちは，カルヴィニズムがいわゆる

「中産的生産者層」にもっとも適合した宗教意識であったことから，ペティやロック，フランクリンといった人たちがなぜに「広い意味における働く階級の立場」（白杉庄一郎）に立つことができたのかを十分に納得することができよう（白杉庄一郎『経済学史概説』53，56，119ページ；出口勇蔵編『新訂・経済学史』68，71ページ；久保芳和『フランクリン研究』88ページ）．スミスもまた勤労者に共感を寄せていた（E. F. Hecksher, *Mercantilism*, II, p. 328 〈Revised Second Edition〉）．この意味でかれらの経済理論はすぐれて生産者的なのである．

これに対して，効用価値論は個人の主観的な効用（評価）を離れては価値は存在しない，という前提に基づく．こうした考えはアリストテレスに始まり，ブリダヌス J. Buridanus, ロッティーニ C. F. Lottini, ダヴァツァッティ B. Davanzati, モンタナリ G. Montanari, ガリアーニ F. Galiani, テュルゴー A. R. Turgo, コンディヤック E. B. de Condillac といった一連のラテン系の学者により発展させられてきた．かれらはほぼ例外なくアリストテレス主義に立つスコラ哲学者かカトリックの僧職者であった（E. Cauder, *ibid.*, pp. 3, 17-29；J. A. シュンペーター，前掲書VI，2216ページ）．

こうした人たちは，スミスの眼には「ふたつの道徳体系」のうち，生産者層と結びつく「厳格または厳粛な体系」ではなく，「自由または放縦な体系」をとる「上流の人々」と映じたに相違ない（A．スミス，前掲書IV，181ページ参照[5]）．その典型はロッティーニであろう．彼は前期的大商人の代表たるコシモ・ド・メジチの秘書であると同時にヴェニスの殺人団の領袖でもあった．

ラテン系の学者や僧職者たちが使用する言語は「労働貧民，すなわち人民大衆」（A．スミス，前掲書IV，159ページ）にはおよそ無縁の「学者の言語」，すなわちラテン語であったことは言うまでもない．民衆の世界から隔絶された世界

5) ここでスミスが「自由」と「放縦」とを同義語として使用していることに注目されたい．ウェーバーによれば，「世界の一切を意識的に個人的自我の現世的利益に関係させ，その見地から判断するような生活態度」は，「イタリア人やフランス人のような》iberum arbitrium《（自由意志）が血となり肉となっている諸民族」の特色である．この「自由意志」の実質は利己的な振舞の絶対的な厚顔しさ，あるいは良心の欠如でもある（M．ウェーバー，前掲書，上，53，94ページ）．

に住むかれらは，したがって生産の基盤を欠き，民衆と生産とに外部から寄生する存在たらざるをえなかった．

その結果，労働や生産（とりわけ，世俗内における）に対しても積極的な意義を見出すことは少なかった．マルクスは「南国人」には労働はやむをえない「骨おり」fatica 以上のものではありえなかった，としている（K. マルクス『経済学批判』〈前掲〉42ページ）．ピュウリタンたちが労働を神聖視し，額に汗して生産に励んだのとは，まさに対蹠的なのである．

もっとも，スミスもときには労働を「労苦と骨おり」toil and trouble と呼ぶことがあるが，その内容には浪費や非生産的な利得とはおよそ反対の「額に汗して」働くという意味での「勤勉」（スミスの勤勉ぶりを想起されたい）が含まれているのを忘れてはならない（大河内一男「アダム・スミスにおける労働者型」楊井克巳・大河内一男・大塚久雄編『古典派経済学研究』47ページ）．

額に汗して働くことに関してラテン系の学者が極めて消極的な評価しか下すことができない結果，労働はたんなる必要悪とみなされ，生産よりもむしろ自己の欲望を満足させること，すなわち消費に第一義がおかれるのは見やすいことである．

いわゆる「資本主義の精神」あるいは「経済人」の誕生にさいして，かかる労働観の差異がいかなる結果をもたらすにいたったかをもここであわせて想起すべきである．

Ⅷ　効用価値論とアリストテレス主義

「カトリック・トマス主義的思考類型」の源泉は言うまでもなくアリストテレスである．彼を代表とするヘレニズム思潮では人間の「不平等性」がなんら疑問なく自然なものとされている．その限りにおいて労働価値論のひとつの前提，すなわち労働の平等性を最初から欠いている．アリストテレスが人間，したがって労働の平等性を見抜けなかったのは時代的・社会的制約のためである，とマルクスは断定する（K. マルクス『資本論』〈前掲〉Ⅰ，56ページ）．

さらにマルクスは次のように主張する．

「商品生産者たちの一般的・社会的な生産関係なるものは，彼らが，その諸生産物を商品として，つまり価値として取扱い，この物象的形態において彼らの私的諸活動を同等な人間的労働として相互に連関させるという点にあるのだが，こうした商品生産者たちの社会にとっては，抽象的人間を礼拝するキリスト教が，最もふさわしい宗教形態である」（K．マルクス『資本論』Ⅰ，72ページ）．

キリスト教(ヘブライズム)，とりわけカルヴィニズムが商品生産者たちにとって最適の宗教とされるのは，人間の平等性を本質的な契機とするからである．

ここにいたって，アリストテレス（ヘレニズム）とカルヴィニズム（ヘブライズム）との差は歴然としてくる．それはアリストテレスに対する評価がそれぞれの思想の中で相反することからも明瞭である．

アリストテレスはラテン系諸国の学者や僧職を中心とするスコラ哲学者（神学者）の間に圧倒的な支持層を見出す．彼の思想はオランダを除く大陸の諸大学やカトリック教会と結びついて，史上，巨大な力をふるってきた．中世のスコラ哲学者にとっては，アリストテレスは「哲学者そのもの」であり「大学の教師そのもの」であった（J．A．シュンペーター『経済分析の歴史』〈前掲〉Ⅰ，18ページ 註7）．ルネサンス期のイタリアでは彼の著作は教養人に不可欠の「共有財産」であった（J．C．ブルクハルト〈柴田治三郎訳〉『イタリア・ルネサンスの文化』296ページ）．

これに対して史上，もっとも徹底した反アリストテレス主義の立場をとったのはプロテスタント，なかでもカルヴィニストであった．かの宗教改革者たちはトマス・アクィナスやアウグスティヌスなどの教父たちが「キリスト教のギリシア化」，すなわちヘブライズムのヘレニズム化（アリストテレス化）をはかったことに対して中世のカトリック教会とその教義とを激しく攻撃したのである．

以来，ピュウリタンたちにはアリストテレス主義やトマス主義，スコラ哲学への嫌悪感が共通して見受けられる（M．ウェーバー，前掲書，下，73ページ 註8，

107—108ページ 註5，209ページを参照)．たとえば「敬虔派」Pietism のシュペーナー P. J. Spener にとっては，アリストテレス哲学は実に「キリスト教の根本害悪」であった (M. ウェーバー，前掲書，下，126ページ 註14)．

前に見たようにスミスが「新教徒」たることを自認している以上，アリストテレス主義に対する彼の態度はもはや明白である．念のために再述すれば，彼が「アリストテレス主義の牙城」たるオックスフォードを「このまなかった」ばかりか，「嫌悪の念をもって」離れ去ったのも無理からぬことであった．そこで教えられるスコラ哲学は，スミスにしたがえば「詭弁やナンセンスの無用で衒学的な集積にすぎないと一般に信じられている科学」にほかならなかった (A．スミス，前掲書IV，156ページ)．スミスがグラスゴウ大学の講義でスコラ哲学や形而上学を排斥したことは前に述べた通りである．この意味からも，スミスを「アリストテレスの弟子」とみるハーストの見解（前出）は的はずれと言わねばならない．

同様にスミスの価値論をカルヴィニズムとアリストテレス主義の合成物と見るカウダーの所説も皮相的すぎる，と言うべきであろう．『諸国民の富』は一面においては「アリストテレス主義批判」ではなかったか．

スミスについて言えることはロックにもあてはまる．ロックのピュウリタン的な性格についてはいろいろ論議のあるところであるが，彼の反カトリック的な姿勢だけは終生，変わることがなかった，と思われる (高梨幸男『自然法と民主主義の思想構造——ロック研究序説』14ページ)．オックスフォードで学んだアリストテレス主義やスコラ哲学に対しては学生時代から強い疑問を抱いていた (岩田朝一『ロック教育思想の研究』193ページ；平井俊彦『ロックにおける人間と社会』〈増補版〉49ページ)．したがって，大学在学中のロックが長老派や「組合派」Congregationalism といったカルヴィニズムに反感を寄せていた，とするカウダーの見方 (E. Cauder, *ibid.*, p. 5 n7) は正しいとは言い難い．

スミスやロックについて言えることは，労働価値論の創始者と言われるペティにも共通する．彼もまたスコラ哲学に否定的であった (松川七郎『ウィリアム

・ペティ』上，66，175ページ）．彼は「形而上学その他無用の思弁にふける」ことは非生産的な行為以外のなにものでもない，と考えていた（W．ペティ〈大内兵衛・松川七郎訳〉『政治算術』69ページ）．

さらにフランクリンの場合はどうであろうか．彼の父親は信教の自由を求めてニューイングランドへ移住したピュウリタン移民のひとりであった．その血をひくフランクリンの思想と行動とは，疑わしい形而上学的な思索にふけるよりも有用な事をなすべき，という信念でやはり貫かれていた（久保芳和，前掲書，52ページ）．

「スミスの価値論の出発点」を形成したとされているハチソンとて同様である．彼がグラスゴウ大学においてそれまでの講義の旧習——スコラ哲学をラテン語で注釈するやり方——をあらためたことを想起されたい．

かくして学説史上，労働価値論を形成した代表的な人たちはカルヴィニズムに深く感化されていたがゆえに共通してアリストテレス主義やスコラ哲学に好感を寄せることができなかった，と断定しても大過なかろうと思う．とはいえ，かれらの態度はもとより学問上の批判的な摂取とは別であることは言うまでもない．たとえばスミスの中にもスコラ的要素が含まれるが，それを積極的に評価する（松浦保「スミス経済学におけるスコラ的要素」『三田学会雑誌』〈慶応義塾大学〉第69巻 第6号，1976年8月）のか，しないのか，という問題である．

なお，イギリスに限定してみると，カルヴィニズムが「イギリスのヘブライズム」（ウェーバー）と言えるならば（M．ウェーバー，前掲書，下，197ページ），アングリカニズムは基本的には「イギリスのヘレニズム」と類型化することが妥当であろう．というのも「アングリカンとピュウリタンという二つの主張はその思想的な系譜をたどれば，ルネサンス・ヒューマニズムと宗教改革とにそれぞれその源を発していると考えられる」からである（浜林正夫『イギリス市民革命史』58ページ）．

この点，労働価値論の完成者たるマルクスが自身ユダヤ人であることも手伝って，「その思考方法の根底ふかくに，ヘレニズムが横たわっている」と指摘

されているのは興味深い（岡本清一『ナショナリズムの論理』63ページ，傍点は本井）．彼はキリスト教に対して対立的であったにもかかわらず，その論理は「神を抜きにしたカルヴィニズム」（大塚久雄）とときに呼ばれることさえある（大塚久雄『社会科学の方法』141ページ）．

これに対してトーニー R. H. Tawney はスコラ哲学者のアクィナスをして労働価値論の創始者とみなし，その完成者たるマルクスを「スコラ哲学者の最後のもの」としている（R. H. トーニー〈出口勇蔵訳〉『宗教と資本主義の興隆』上，75ページ）．はからずもトーニーのアングリカニズムの立場がここによく示されている[6]．

また，利子論に限定されてはいるが，スコラ哲学者とピュウリタンとの共通性を強調するのはシュンペーターである（シュンペーター，前掲書，I，217ページ；竹内幹敏「農業改良と反独占運動における資本主義の精神」水田洋編『イギリス革命』74ページ 註1）．

このようにスコラ哲学に近代的な性格を大きく見ようとする人たちは，労働価値論をスコラ哲学の延長線上にこめて位置づけようとする．たとえばシュンペーター．「われわれはすでにアダム・スミスの分析の大綱がスコラ学徒と自然法哲学者からきたものであることを知っている」．さらに論をすすめて，スミスの価値論は「労働説」（労働価値論）ではない，とまで彼は断定する（シュンペーター，前掲書，I，393—394ページ 註20）．

こうした見解は，スミスを「効用価値の祖」とみなす効用派の見方——いまもって完全に否定されたとは言い難い（高島善哉『アダム・スミス』187ページ）——と同程度の誤解に基づくと言うべきであろう．

以上のことから，これまで支配的であったスミス像には修正が加えられねばならない．水田洋氏はスミスの思想上の系譜をルネサンス・ヒューマニズムに求める結果，スミスを「ルネサンスの正統の後継者」とみなされる（水田洋，

6) 「資本主義の精神」に関して，トーニーがついにウェーバー——明白にカルヴィニズムの立場に立つ——を理解できずに終ったのは，根本的にはここに原因があったと言わねばならない．

前掲書，73ページ．なお高島善哉『アダム・スミス』67—68ページをも参照）．こうした解釈（アングリカニズム的！）は，スミスを言うならば「宗教改革の後継者」としてとらえようとする本稿の立場とは，ルネサンスと宗教改革との本質的な差異（E. トレルチ E. Troeltsch が明らかにした限りでの）を認める以上，きわだった対照を示す．

かくしてスミス経済学，とりわけ労働価値論の系譜についてようやくひとつの到達点にたどりついたようである．スミスを宗教改革者，なかでもカルヴァンの後継者としてみなすことができるならば，スミスの宗教意識は理神論であると一言のもとに片づけられないものが残るのを認めないわけにはいかない．

スミスのいわゆる理神論は，決してさめた頭のものだけではなく，長老派の信仰（教会）への暖い「深い共感」に基づくヨリ生きた形をとったものであった．本稿の冒頭で見たように，彼は長老派の信徒たちの「道徳的な熱情から少なからぬものを吸収した」のである．

「新教徒」と自称したスミスのこのような宗教意識の内実と系譜上の位置とを正しく見定めることは，エートスとロゴスとがみごとに調和されたスミス経済学を理解するうえに不可欠の基礎的な視点を与えてくれるはずである．

スミスとその経済学とをカルヴィニズムの視角から検討し直すという作業を行なわない限り，解明されない問題がそのまま残されよう．たとえば，スミスはなぜに自然神学を道徳哲学の講義で第1部にすえたのか．もっとも，第1部は「彼〔スミス〕の講義の重要部分ではない」と等閑視することも一応は可能であるが（小泉信三，前掲書，34ページ．キャナンも同意見である．大道安次郎，前掲書，60—61ページ 註7），本稿は大道安次郎氏にしたがって，自然神学——草稿は残念なことにスミスの死の直前に焼却されてしまった（D. Stewart, *ibid.*, p. 512）——は彼の道徳哲学全体の「根底」であると確信する（大道安次郎，前掲書，57ページ）．

IX 本稿の限界

本稿の狙いはスミス（経済学）の全体像を描き出すことではもちろんなく，ただ彼の内なる宗教意識を類型的に把握しようとすることである．その結果，本稿は一面的たらざるをえない．

換言すれば，スミスのエートスに見出される無限の多様性の中から特殊の観点からみて本質的に意味ありと考えられる事柄だけをすくいあげる，つまり有限の一片だけを抜きとろうと試みた．その試みは「或る意味では歴史的現実に暴力を加えるもの」であるけれども（M. ウェーバー，前掲書，下，68ページ 註4），一面的な観点を離れては真に客観的な分析が不可能となることも事実である．

したがって本稿では，スミスのエートスに見られるアリストテレス主義やスコラ哲学，スミスが尊敬していたルソーやヴォルテール，さらにはスコットランド学派などを考察の直接の対象とはしなかった．それは，「ジョン・ロックやアダム・スミスは同時代のイタリアやフランスの人達の業績に対して何の興味も示さなかったし，他方，後者もまた前者に対して同様の態度をとった」とのカウダーの見解（E. Cauder, *ibid.*, p. 9）にしたがって，これらの要素を無視したからではない（ちなみに，カウダーの所説は明らかに行きすぎである）．この面から別のスミス像を構成することはもちろん可能である．

今回，それを避けたのは，問題の立て方から帰結する方法上の処理のためであると同時に，それ以上に，これまでのスミス研究が主としてこの視点からなされ，すでにかなりの程度，開拓されているからである．たとえばスミス研究第一人者の水田洋氏．氏はスミスを「ルソーの同志」とか「アリストテレスの弟子」としてとらえるなどスミスの中にルネサンス的，あるいはギリシア的な要素を大きく認めようとされている（水田洋「スミス経済学の源流」参照，内田・小林・宮崎義・宮崎犀編『経済学史講座』I）．日本におけるスミス解釈はむしろこの方が主流なのである（水田氏のほかには，高島善哉『アダム・スミス』106,

125ページ，大道安次郎，前掲書，80ページ，小泉信三，前掲書，34ページなどを見よ）．

今回，ここで試みた視点はこれまでほとんど無視されてきただけに，スミス像の中に潜むカルヴィニストの要素をことさらに（一面的に！）強調することとなった．本稿が新しい（多面的な）スミス像の再構成のためにひとつの布石となればさいわいである．